

2004 年防災教育チャレンジプラン最終報告書

記入日 年 月 日

I 概要

実践団体・担当者名	国立病院東京災害医療センター（現、国立病院機構災害医療センター） 臨床研究部 （担当者：原口義座 ）	
連絡先	042-526-5563、 or 042-526-5511 ex.2303, 2304	
プランタイトル	高校生にも災害時の医療の必要性をしてもらおうーまず高校生に対する災害医療教科書の作成からー	
目的	災害時医療は、災害にあった時に命を救う、外傷を軽くする、早く回復させる、精神的・心理的にバックアップするなど大変重要です。特に平成 16 年度は災害が多発しました。しかし災害時の医療の教育体制は、欧米先進国においても十分ではないと思われます。ここでは高校生にも災害時の医療・健康危機管理の重要性を理解してもらい、お互いに助け合えるようになることを目的として活動しました。	
プランの概略	当初の研究の手順を少し変え、まず、教科書（パンフレット）作成の基礎的な内容として、一般用の住民をも対象に含めた災害医療の啓蒙のパンフレットを本活動と並行して行い、作成した（たたき台の作成）。本パンフレットを、平成 16 年 9 月 12 日に立川市自衛隊基地で開催された立川防災航空展で一般の見学者に配布した。その上で、別個に作成したアンケートを高校生を対象として行った。その結果、まだ災害医療に対する知識が必ずしも十分でないことが感じられたが、高校生としての災害に対して積極的に取り組むという方向性が多くの回答者の意見としてみられることも感じられた。なお、一部には、強い取り組みへの姿勢がみられた。今後、1) 今回行ったアンケートを更に改良したアンケートをベースに継続することにより現在の高校生の災害医療への理解度をより幅広く知り、2) その結果をベースに比較的簡単な内容からやや専門的な内容までの系統的な教育用の災害医療テキストブックの作成、3) 実際の教育へ向けた活動を行う。なお、そのための基礎資料として既に当施設で作成している災害医療簡便辞典を改訂する。	
プランの対象と参加人数	高校生 73 名、 教科書原案作成に関して、7 名で行った。	
実施日時	平成 16 年 12 月	
主な実施場所	立川自衛隊機地：一般参加者（大人～小児まで）、兵庫県舞子高校	
連携した団体名、 連携の方法	連携団体の有無	あり
	連携した団体名	兵庫県舞子高校
	連携したきっかけ・理由	本研究班で紹介された
	連携団体へのアプローチ方法	同上
	連携団体との打合せ回数	電話、メール等での打ち合わせ 3 回程度
	連携団体との役割分担	アンケート依頼

Ⅱ プラン立案過程

プラン立案 メンバーの 人数・役割	団体内のスタッフ総人数	5名
	外部スタッフの総人数	2名
	主なメンバーの 役職・役割	基本的な内容の作成 原口義座 室長 全体的な調整・組み立て 友保洋三 文章等のチェック・印刷 鈴木伊津子
プラン立案に要し た日数・時間	立案期間	16年 6月 1日 ～ 17年 1月 15日
	立案時間	2時間× 10回 時間× 回
	上記のうち打合せ回数	5回
プラン立案で 注意を払った点 工夫した点	アンケートの内容	
プラン立案で 苦労した点	各高校生の、認識度、意欲等が不明であり、	

Ⅲ 実践にあたっての準備

準備に関わった方 と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	5名
	外部スタッフの総人数	2名
	主なメンバーの 役職・役割	基本的な内容の説明 原口義座 室長 全体的な説明 友保洋三 部長 アンケートの送付等 鈴木伊津子 事務
準備に要した日 数・時間	準備期間	16年 6月 1日 ～ 17年 1月 15日
	準備総時間	2時間× 10回 時間× 回
	上記の内打合せ回数	5 回
教育関係への 働きかけ	働きかけた教育関係者・ 機関名	舞子高校 教諭
	どのように働きかけたか	本会の中間報告会等で、

	結果	有意義であった
地域への 働きかけ	働きかけた地域の人・ 機関名	立川自衛隊機地関係者、防災航空際参加者
	どのように働きかけたか	パンフレット配布、意見交換
	結果	意義があった
保護者・PTAへ の働きかけ	働きかけた保護者・ PTA組織名	特になし
	どのように働きかけたか	
	結果	
機材・教材の 準備方法	用意した機材・教材	パンフレット作成 アンケート作成 災害医療簡便辞書
	入手先・入手方法	独自に作成
	機材・教材選定の理由(な ぜこの機材・教材を選ん だのか)	独自に作成したもの
参加者の募集	募集方法	特にせず
	募集期間	年 月 日 ~ 月 日
	参加予想人数	名
	実際の参加人数	名
	募集方法の成功点	
	募集方法の失敗点	
準備で苦労した 点・工夫した点		アンケート内容に関して アンケート依頼施設に関して アンケート評価に関して

Ⅳ タイムスケジュール（プラン立案から実践終了までのスケジュールを記載して下さい。）

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2003 11月		災害医療簡便辞書の暫定版作成	
12月			
2004 1月			
2月			
3月			
4月	基本的な進め方の検討	基本的な進め方の検討 災害医療簡便辞書の見直し	
5月			
6月			
7月			
8月			
9月	一般住民も含めた検討から開始	パンフレット作成・配布	
10月	アンケートの原案の作成	アンケート依頼施設の想定・依頼	
11月			
12月	アンケート暫定最終案作成	アンケート施行を依頼、施行	
2005 1月	アンケート集計、テキストブック 基礎原案作成へ向けての必要事 項の最終確認	アンケート集計、分析、高校生用簡略版テキ ストブックの作成(準備中)、はやわかり簡便 辞典(改訂)	

VI 実践後

参加者への アンケート結果	アンケート対象を兵庫県の高校にさせていただいた結果、若干特殊であるかもしれないが以下の結果がえられた。なお、コントロール施設はえられず、正確な比較評価は困難である。 1) 身近な関係の人で、災害に遭遇した経験がある：5/37 と 14/36 で 19/73(26%)と高率 2) トリアージに関して、知っている 22/73(35%),きいたことがある 18/73(25%)、知らない 33/73(45%)と文献的データ(10%程度)より高率であった。 3) 心肺蘇生の訓練の経験 55/73(75%)、学習 16/73(22%)、なし 2/73(3%),とほぼ全員が訓練の経験・または知識習得しており、この面での基本的な教育がなされていることが確認された 4) 地震時に多く発生する重要な疾患としてのクラッシュ症候群(挫滅症候群、圧挫症候群) 知っている 14/73(19%),きいたことがある 32/73(44%)、知らない 27/73(37%) 5) 災害弱者:という意味での CWAP という言葉、知っている 8/73(11%),災害弱者という言葉まで含めるときいたことがある 15/73(21%)、知らない 50/73(68%) 6) 災害時のボランティアに関しては、参加の意思・興味 あり 61/73(%), なし 12/73(%)と高率に前向きの姿勢であると考えられた 7) 医療面のボランティアに関しては、参加・興味 あり 29/73(40%)、なし 34/73(47%), わからない 10/73(14%)であり、医療という面からは、少しわかりづらい可能性が残された。なお、学年により差がみられるようであり、比較検討中である。	
成果として 得たこと	上記のごとく、一定程度の医療面での災害時の対応に関して、知識を持っていることが判明した。また、ボランティアとしての活動に興味をもっているものも多数を占めており、社会、医療施設として、受け入れることができるような適切な準備を、体制として、あるいは受け入れ側として前もってなされていれば、災害時により協力関係が期待できると考えられる。 その点からも、高校生が、今後更に災害と災害医療の知識を増やし、また実技面でも、実力をつけることは意味があると考えられる。 この他、津波が襲ってきた際に、災害弱者に対してどのように対応(援助)を考えるかを、記述式で記載してもらった。正直な、前向きの回答がえられたと思われる。これらに関しても、現在集計しつつある	
成果物	(学習指導案、指導計画書、配布物、ワークシート、報告書、掲載記事等。 データがあればデータファイルを貼付して下さい。) 詳細な報告書を作成中である。なお、報告書の途中経過を別個に送付する。 災害医療簡便時点も改訂中である。 これらをベースに、テキストブック：高校生用のものの原案を作成しつつある。	
広報方法	広報した先	積極的には行っていないが、一般的な災害医療への取り組みの一環としては、広報先は特に限定せず伝えている
	広報の方法	災害医療研修会等の医療関係での会合・講演会等で
	取材にきたマスコミ	現在ないが、近日中に取材の希望がある
	広報された内容(掲載された記事・番組等)	
	成功点	
	失敗点	
全体の感想と 反省・課題	まだ、十分な数の施設としての高校・あるいはアンケート数としての高校生が、少なく、パイロットスタディとしての研究成果である。アンケート内容に関しては、1)入門的なもの、2)専門的なもの、3)目を通して楽しいもの、など幾つかの観点から修正を加える必要があると考	

	えている。しかし、これをベースに、幅広く、災害医療をしってもらう方向で、今後も研究を継続したいと考えている。	
今後の予定	来年度以降の進め方	基本的には、高校生は、災害医療にも、積極的に取り組む意思があると思われる。今後検討対象の施設を増やす。都市部、地方・郊外での高校、などを希望している。また災害医療はわかり簡便辞典を(興味を有する学生に)配布したいと考えている
	是非実施してみたい取り組み	まだ、これからの長い取り組みとして、高校生の今後の希望からの視点:理科系、文科系、医療関係、就職・大学進学・その他の方向性別のテキストブック内容の作成も視野において、取り組みたい。